

森いづみ

もり・いづみ

一年前、こんな文章を書きました。コロナ禍は、社会に多くの課題を突きつけた。この先、新たな危機に直面しながらも現在を生き抜き、未来を考える際に「拠り所」となるのは、過去から積み重ねられてきた社会の営為・人類の叡智であろう。図書館の社会的使命は、「知る権利」「学ぶ権利」を人々に保障することである。あらゆる情報格差をなくし、誰もが自由に情報へアクセスできる「知的創造の基盤」を整える役割は、社会の変容や技術の進展に適応しながらも、図書館の本質的機能として不変である。[※]——公共施設の休館要請を受け、自らの存在意義を問い直していた時期のことでした。

「社会の営為・人類の叡智」とは何でしょうか。博物館なら博物資料、図書館なら書籍や雑誌、文書館なら公文書などが、有形のものとして長い年月にわたって収集・保存・提供されてきました。源流を同じくする各館が、機能分担しつつデジタルとネットワークの力で越境し、より豊かなアーカイブを構築・発信するのがMLA連携です。これに対して、公民館や、近年注目される「交流の場」としての図書館、コミュニティ・スクールのような学校教育の新たな展開では、地域における人々の学びの行為そのもの、記憶そのものが「社会の営為・人類の叡智」だと言えるのではないのでしょうか。これら無形のものもまた、アーカイブ化し、地域の共有財産として保存・活用・継承したい対象です。

この一年、オンラインによるバーチャルな「場づくり」がぐつと進んだ一方で、リアルだからこそ人の温もりが大切に感じられました。「知る」「学ぶ」手段が多様化するなか、リアルとバーチャルのベストミックスを模索し、さまざまな対話や実践を重ね、県立長野図書館では7月に「ミッション・ビジョン」を策定しました。これからの図書館を「共知・共創の広場」と表現し、新しい「学びの公共空間」像を描き出しています。

図書館の本質的機能は不変ですが、その実現手段は、変化し続ける社会や地域の特色を生かしながら、さまざまな形で進化しています。館種を越えてお互いの強みを持ち寄り、希望のある未来を共に創りだせたらと願っています。

(もり・いづみ 県立長野図書館長)

※森いづみ、中村竜生、ウイスコロナ時代の公共図書館を模索する…県立長野図書館の取り組み「図書館雑誌」114(9)2020.9